美しい世界を願う

歌はきれいだ
透明な言葉が人の心を揺さぶる
美しい歌は許されるというのに

五月の風は心地よい
新緑の匂いと大地の温かさがまじりあう
少しかすみがちの太陽と薄く青い空
ああ、もう初夏なのだ
――たとえ、この文章に一日を費やしていたとしても。誰かが鼻先で笑うだろう
「薄っぺらでリアリティがない」と

リアルさとはなんだ

鬱という病を抱え、死ぬ勇気のない精神で
覇気なくただ生きているだけの生物が私だ
日々
溜っていく洗濯物
押しつぶされた服の下から蜘蛛が這い出し
粘り気のある汁を出し腐っていく惣菜
かびて袋の中で糸をはる食パン
――これが、リアルか
これにならリアリティを感じるか

誰もが美しさを求めるのに

私と貴方
二人の距離は昨日よりちぢまっている
何よりも何よりも大切な時間

……山本洋子

タチアオイの芯が空を仰ぎ
暮れていく太陽がきらめく
その残照の赤い閃光さえいとおしい
――こう書けば、流れるような文章は心に響かない。リアルさを感じない、薄っぺらく手垢のついた文章だと、笑われるのだろうか

笑うのは誰だ
私だ

鬱と診断され、抗鬱剤をのみながら
「じつはただの怠け癖ではないか」と
自問自答し
「大方の患者がその悩みを抱きます」と
本の一文に、自分だけではないと安堵する
そんなところまで、他人と同一であることが嬉しいか
追い求める個性だの、自分探しだのは
どこへいった
日常生活は破綻し
風呂に入るのさえ億劫で
自分のすえた臭いにうんざりする
鼻をかみ、枕元に投げ捨てる
部屋は散乱し、ゴミを掻き分け薬を探す
自分でひねりだした汚物を水で流すように
汚いものを見てみないふりをして
生きていけばいいのか

誰もが美しさを求めるのに

美しい言葉だけで構成される世界には
リアリティが存在しない
リアルであることは必要か

世界を美しいもので染め上げたいのに
リアリティが邪魔をする

誰もが美しいことを願うのに